

# 日本語・日本文化研修留学生のための プログラムと授業

浮田 三郎

## はじめに

現在、日本政府給付の留学生の中で、日本の国際化と言う点からも大いに注目に値する「日本語・日本文化研修留学生」の数も着実に増えてきている。1990年度の日本語・日本文化研修留学生の受け入れ予定総数は日本全国で170名に上り、広島大学の場合も、その数は19名(大学推薦の留学生を含めると23名)に上っている。

近年、日本における外国人留学生の数が増加するに伴い、国費の留学生も私費の留学生もその種類は非常に多様化し、彼らの要望や研究目的も非常に多様化して、彼らの受け入れの問題から教育の問題まで様々な問題点が議論されるようになってきている。

そんな中で、日本語・日本文化研修留学生に限ってみても、彼らの研究目的は実に多様である。例えば、広島大学の場合でも、彼らの研究テーマは、日本語、日本文化、日本文学(古代、中世、近世、現代等)、日本語教育、経済、法学、歴史、地理、宗教、等と非常に幅が広く多様である。

このように多様な留学生にどのような研究と研修の場を与えてやることができるか、彼らを全体的にまとめて捉えるか、バラバラに考えるか等いくつかの考慮されなければならない点がある。彼らが日本で十分に満足 of いく研修と研究生活を送るためには、留学生の受け入れ体制の問題、指導教官の問題、授業の問題等、多くの問題点が解決されなければならないであろう。

そこで、本稿では、主に広島大学の場合を例にとり、日本語・日本文化研修留学生のための受け入れ体制、指導教官、授業やプログラム等の現状はどのようなようであるか、そしてその問題点を探り、その解決策を検討してみよう。

## 1、日本語・日本文化研修留学生

### 1) 日本語・日本文化研修留学生の意義

日本語・日本文化研修留学生とは、文部省から奨学金を受け、各国の大使館及びその他の公館によって推薦される研究留学生で、日本語及び日本文化に関する何かのテーマについて、日本で10月から翌年の9月まで1年間研究と研修をする学部レベルでの研究生である。年齢は19-25歳の間で、主として各国の大学の3年次及び4年次在学生在が中心(基本的にはそうであるが、国によっては中

には日本語の教官とか研究者等も含まれているようである)で、国費の研究留学生の中では若いグループを形成している。

昨今話題になる「日本の国際化」を考えると、この比較的若い日本語・日本文化研修留学生の受け入れは、大いに意義深いものとなるであろう。即ち、彼らは、日本語、日本文化、日本経済、日本の自然等日本に関する何かに関心を持っているのであり、そのような分野で大いに突っ込んだ研究をすることが期待され、したがって、彼らの研究は、日本人以外の目から見た日本を語ってくれることにもなり、日本が日本自身を見直す客観的なデータを提供してくれることにもなるからである。

彼らには大いに日本人の社会の中にも入り込んで行って、日本人、日本人社会、日本の良い点も悪い点も見出し、しっかりと考察して欲しいものである。彼らがただ単に親日家になるのを期待するよりも、真の知日家となって、本当の日本の姿を批判したり評価したりするようになることを期待したい。

## 2) 日本語・日本文化研修留学生の歴史

日本語・日本文化研修留学生の受け入れは、1979年度から始まっているが、広島大学では、1985年度からこの留学生の受け入れを始めている。その受け入れ状況は、次の表の通りである。

なおこの外、広島大学の教育学部では、1981年度より、大学推薦でイギリスのオックスフォード大学から受け入れている国費の研究留学生も1～2名いるが、日本語・日本文化研修留学生と同様な扱いで受け入れられており、1987年度より始めた日本語・日本文化特別プログラムには等しく参加している(もっとも、この日本語・日本文化特別プログラムは、日本語・日本文化研修生を中心にして全学に開かれたプログラムであるので、その外の留学生も参加している)。大学推薦によるオックスフォード大学からの受け入れ状況は、1981年度1名、1982年度1名、1983年度1名、1984年度2名で、1985年度から1990年度も2名である。1985年度以降の数字は表の中の括弧内の数字である。

また、1990年度からは、同様な扱いでニュージーランドのオークランド大学から1名及びアメリカ合衆国のミシガン大学から1名大学推薦の研究留学生を受け入れている。これも表の括弧内の数字で示す。

表

年度	出身国別	受け入れ学部別	計
1985	イギリス1、中国1、ニュージーランド1、 オーストラリア1、韓国1 (イギリス2)	教育学部2、文学部2、学校 教育学部1、 (教育学部2)	5  (2)
1986	中国2、イギリス1、タイ1、フランス1、 アメリカ合衆国1、カナダ1、ドイツ1 (イギリス2)	教育学部4、文学部2、学校教 育学部1、経済学部1、 (教育学部2)	8  (2)
1987	タイ3、インドネシア2、中国2、韓国1、 フランス1、オーストラリア1、 フィリピン1、(イギリス2)	教育学部11(全員)  (教育学部2)	11  (2)
1988	中国3、アメリカ合衆国3、韓国2、 タイ2、インドネシア1、ブラジル1、 ベルギー1、オランダ1、フランス1、 スイス1、(イギリス2)	教育学部17(全員)  (教育学部2)	17  (2)
1989	韓国5、中国3、アメリカ合衆国3、 オランダ2、シンガポール1、香港1、 インドネシア1、フランス1、ソ連1、 ポーランド1、(イギリス2)	教育学部19(全員)  (教育学部2)	19  (2)
1990	タイ3、インドネシア3、フランス2、 韓国1、アメリカ合衆国1、メキシコ1、 ベルギー1、ドイツ1、イタリア1、 スイス1、ポーランド1、ハンガリー1、 ユーゴスラビア1、ソ連1、 (イギリス2、アメリカ合衆国1、 ニュージーランド1)	教育学部15、 総合科学部2、文学部1、 学校教育学部1  (教育学部4)	19    (4)

## 2、日本語・日本文化研修プログラム

それでは、広島大学の日本語・日本文化研修留学生のための研修・研究体制、授業、プログラムの現状はどのようなものであるか、それぞれ検討してみよう。

### 1) 日本語・日本文化研修留学生の研究体制と授業

過去広島大学で学んだ日本語・日本文化研修留学生の数の推移と指導教官の所属学部との関係は、1の表で見た通りである。(稿末の資料も参照)

彼らの指導教官には、留学生の研究テーマに沿ってその指導に当たることのできる各学部の文化系の教官が当てられてきた。が、ここ数年間は、教育学部の日本語教育学科の教官と日本語・日本事情の教官が中心になって彼らの指導教官を引き受けている。遡ると、1981年以降1986年までは、1で述べた大学推薦の留学生達の指導教官も、日本語・日本事情の教官が当たっていた。それは、日本語・日本事情に与えられた性格故でもあった。

こうして、各研修留学生は、各指導教官の指導のもとで、研修と研究の計画を作成し、出席すべき授業などの計画を立てるのである。1985年度までは、日本語・日本文化研修留学生にも日本人の学生チューターが宛てがわれるべく謝金の予算処置が取られていたので、留学生達は定期的にも日本人学生のアドバイスを聞くことができたし、日本人学生とも交流するチャンスができてよかったようである。

現在は、日本人の学生チューターのための謝金の予算処置はとられていない。

### 2) 日本語・日本事情の授業

「日本語・日本事情」の授業は、全学の留学生全体に開かれたものであり、大ざっぱに初級、中級、上級の日本語の授業と日本事情の授業に分かれ、必ずしも日本語・日本文化研修留学生向けの授業とは言えない。とは言っても、彼らの日本語の実力は必ずしも十分とは言えず、多くの場合、日本語・日本文化研修留学生の指導教官は、彼らにこの日本語・日本事情開設の上級レベルの日本語の授業と日本事情の授業に出席するように指導している。もちろん、指導教官の授業や彼らの研究テーマと関連のある各学部の授業も取るように指導している。

日本文化研修向きと言う意味では、日本事情の授業は一般的に役立つのではなかろうか。ただし、これも、具体的な研究テーマだけに眼を向けている留学生に取っては、些か一般的すぎるかも知れない。

ともかく、日本語・日本事情の授業も十分に研修に役立てて欲しいものである。

### 3) 日本語・日本文化研修留学生のための特別プログラムの現状

そこで、広島大学では、教育学部の日本語・日本事情(講座相当。後に1989年度に日本語研修コースと共に留学生日本語教育ユニット結成、それが現在の留学生センターの前進)が、中心になって、日本語・日本文化研修特別プログラムを組むことにしたのである。それは、何年か要求し続けていた日本文化の特別講義のための留学生教育特別配分経費が交付されることになった1987年度の前期から、その一歩を踏み出したのである。

特別プログラムは、特別講義、実地見学、交流会、キャンプ、反省会・討論会等で構成されている。今まで行われたプログラムの内容(演題等)を大ざっぱに見てみよう。

#### (1) 特別講義

- 1、日本の宗教「宗教と日本人の暮し」 桂紹隆(広大文学部)
- 2、日本の陶芸「窯元を訪ねる」 西本知(陶芸作家)
- 3、日本の経済「貿易黒字を生み出したもの」 高橋衛(広大経済学部)
- 4、日本の建築「日本の建築様式」 鈴木充(広大工学部)
- 5、日本の古典文学 稲賀敬二(広大文学部)
- 6、日本の美術「絵巻物」 斎藤稔(広大教育学部)
- 7、茶道 陣崎美知子(裏千家準教授)
- 8、日本の伝統芸能「神楽」 宇野栄(文化財保存科学研究会)
- 9、日本女性史 高浜清子(広島県地域婦人連絡協議会)
- 10、日本の工業技術「技術開発はどのように行われるか」 木本忠昭(広大総合科学部)
- 11、俳句 米谷巖(広大文学部)
- 12、日本近代史「日本の近代のあけぼの」 有元正雄(広大文学部)
- 13、「日本語の口語と文語」 木坂基(広大教育学部)
- 14、「日本語文法」 長友和彦(広大教育学部)
- 15、「近代日本文学」 相原和邦(広大教育学部)
- 16、「日本の諺」 浮田三郎(広大教育学部)
- 17、「日本人の話し方」 岡崎敏雄(広大教育学部)
- 18、「日本人の外国語コンプレックス」 縫部義憲(広大教育学部)
- 19、「日本の方言」 多和田眞一郎(広大教育学部)
- 20、「日本人のコミュニケーション」 上原麻子(広大教育学部)
- 21、「日本人のことばと心」 細田和雅(広大教育学部)
- 22、「日本の漢字」 沼本克明(広大教育学部)
- 23、「日本語のスピーチフォーミュラ」 奥田邦男(広大教育学部)

- 24、日本の司法 筑間正泰 (広大法学部)
- 25、日本の財政 菅壽一 (広大経済学部)
- 26、日本の宗教 佐竹昭 (広大総合科学部)
- 27、日本の金融 北岡孝義 (広大経済学部)
- 28、日本国憲法 畑博行 (広大法学部)
- 29、日本の政治 今中比呂志 (広大法学部)
- 30、日本史 (中世) 岸田裕之 (広大文学部)
- 31、「日本の国政と地方自治体」 村上武則 (広大法学部)
- 32、日本の美術 金田晋 (広大総合科学部)
- 33、「能の精神世界」 青木孝夫 (広大総合科学部)
- 34、書道 森井一幸 (広大学校教育学部)
- 35、「日本美術の特色」 金田晋 (広大総合科学部)
- 36、「日本の文化と日本人の人間関係」 横田雅弘 (一橋大学)
- 37、西条の昔話 飯田米秋 (郷土史家)
- 38、日本の民話 栗原秀雄 (R C C)
- 39、日本の建築技術 松尾彰 (広大工学部)
- 40、日本の行事 河原崎幹男 (東海大学留学生教育センター)
- 41、近世文学 浮橋康彦 (広大教育学部)
- 42、「日本語を通してみた文化」 中本正智 (都立大学文学部)
- 43、「現代日本女性問題」 平田富美子 (婦人能力開発研究所)
- 44、「日本語の学習」 ミホ・スタインバーグ (名古屋学院大学)
- 45、「片仮名語はどうしてむつかしいか」 カッケンブッシュ・寛子  
(名古屋大学総合言語センター)
- 46、「中国地方の方言」 高永茂 (広島文化女子短期大学)
- 47、「オノマトペに関して」 田守育啓 (神戸商科大学商経学部)

(2) 特別実習

- 1、茶道 陣崎美知子 (裏千家準教授)
- 2、神楽 宇野栄 (文化財保存科学研究会)
- 3、華道 山田芳子 (小原流家元教授)
- 4、邦楽 杵屋六東治 (東京杵屋会長唄宗家派教授)
- 5、日本舞踊 花柳美杉 (花柳流師範)
- 6、書道 森井一幸 (広大学校教育学部)
- 7、日本の陶芸 西本知 (陶芸作家)

## 8、日本のウィンタースポーツ（大山に引率）

### (3) 実地見学

#### 1、広島産業関係

マツダ株式会社、キリンビール広島工場、シャープ工場、そごう百貨店(物流センター)、熊野の筆作り（方古堂）、西条の酒蔵群（賀茂鶴工場）、

#### 2、広島の行政、司法等

広島市役所、広島地方裁判所、広島刑務所、八本松小学校、第一術科学校

#### 3、広島の文化、その他

郷土資料館、NHK広島局、広島城、縮景園、映像文化ライブラリー、花田植え(千代田町)、西条の史跡、宮島、

岩国、尾道、京都・奈良、冬の山陰（大山等）、

### (4) 交流会、キャンプ等

国際交流セミナー：似の島で、夏期と冬季に、広島市青少年センターの協力のもとに行われている。

### (5) 反省会・討論会

1、説明会「日本留学と日本語・日本文化」等 浮田三郎、深見兼孝（担当）

2、討論会「プログラムのあり方等について」等 浮田三郎、深見兼孝（担当）

#### 3、反省会

日本語・日本文化研修が終了する9月に、留学生センター長初め各指導教官にも出席してもらい、研修の終了式の後行う。

## 4) 研修レポート集

広島大学では、日本語・日本文化研修留学生は、従来も一年間の研修と研究の成果を研修レポートとしてまとめて、それぞれの指導教官へ提出するように指導されている。それを集めたものがこのレポート集である。彼らに研修レポートを書くことを課さない大学もあるようであるが、研修レポートを書くことは、彼らに取っても有意義なことであり、是非とも書かせたいものである。広島大学では、研修レポート集を作成しようとする声は従来もあったが、これが実現するのはやっと1988年度生(1989年9月に修了)の研究成果からである。留学生センターとしてはこれからもこの研修レポート集を刊行する予定である。留学生達に取っては大いに励みになったり、重荷になったりである。

### 3、問題点と課題

さて、今度は、2で取り上げてみた日本語・日本文化研修留学生のための授業や研究体制や特別プログラムの現状に関する問題点を見てみよう。もちろん実績を見ての通り、一応の成果は上がっているが、しかし、まだ考慮されなければならない点が多量に残されている。その問題点を探り、その解決策を検討してみよう。

#### 1) 日本語・日本文化研修留学生の現状（多様性の問題）

最初に述べたように、日本語・日本文化研修留学生の多様性（はじめに及び1の表参照）が、全ての問題点のもとにある。即ち、留学生の多様性に対応できるようなスタッフと時間が考えられなければ、全ての留学生に満足の行くような体系的なプログラムや授業を用意することはできないであろう。

留学生の多様性とは、上でも簡単に触れたが、その要点をもう一度取り上げてみよう。

出身国：上表のように1990年度受け入れの場合が一番多く、15カ国に上る。

母国語：同様に1990年度受け入れの場合が一番多く、14カ国語に上る。

年齢：年齢的に開きがあった年は、1988年度生の場合で、20～30歳の開きがある。また、1989年度生の場合も、18～27歳の開きがある。

専攻分野及び研究テーマ：日本語・日本文化研修とは言っても、内容的にはかなりの違いが見られる。「研修レポート集」の題目（参考資料）参照。

日本語の実力：相当の差があり、日本語・日本事情の上級のクラスに入ることのできない学生も何人かいる。日本語の実力差は、研修プログラムを作成する際の基本的な問題点となる。

興味：これも、十人十色である。研究テーマが異なるのとはまた違った面で多様である。

研究体制：指導教官の指導によって、かなり異なる。

指導教官：熱心に指導するタイプと放任タイプがある。また、忙しいタイプもあり、研修が終了までほとんど引き受けた留学生と会う機会がなかったと言うケースもあったようである。

学生チューター：1985年度までは文部省から謝金を受ける日本人学生チューターがいたが、これも面倒見のいいタイプとそうでないタイプとがある。なお、現在は謝金が出る日本人学生チューターの制度を取っていない。

#### 2) 日本語・日本事情の授業（留学生の多様性と日本語関係教官数との問題）

日本語・日本事情の授業は、本来広島大学全体の留学生の日本語教育のために開かれなければならないが、現状のスタッフの数との関係からも、日本語・日本文化研修生だけを対象にした形は取れな



い。基本的には、プレイスメント・テストをして大学全体の留学生を能力別に分けたクラスに振り分けている。したがって、クラスの中には、日本語・日本文化研修留学生達だけよりも多様な留学生が出席していることになる。当然、日本語・日本文化研修留学生は、みんな日本語・日本事情の上級レベルのクラスに出席できる実力を持っていないといけないのであるが、残念ながら、現状はそうではない。

### 3) 日本語・日本文化研修留学生のための特別プログラム

上記2)のようなレギュラーな授業の外に、主として日本語・日本文化研修留学生を対象としたプログラムが2の3)で述べた特別プログラムである。もちろん、大学全体の留学生に対しても開かれたプログラムである。

この特別プログラムを行う際の基本的な問題点は、時間の設定と経費(講義等のための謝金、引率旅費、留学生の旅費)である。さて、特別プログラムの内容は2で概観した通りであるが、次にいくつかの問題点を指摘してみよう。

#### (1) 特別講義

時間：講義をしていただく講師の都合との関係で、設定が難しい。留学生の一番都合のよい日時に設定できない場合もある。

内容と構成：時間と講師の都合の関係、留学生の興味との関係で、必ずしも体系的なものが組めない。

講師の選定：構成、日時、講義謝金等を考慮して、お願いしていると、なかなか思うようには進まない。

講義謝金：留学生教育特別配分経費で賄わなければならない、その額は、年毎に異なり、国の予算が成立してからでないと、十分な計画が立てられない。予算成立が遅れると、計画は悲惨なことになるし、十分な経費が支給されない場合は、謝金が出せない場合が出て来る。

(留学生教育特別配分経費は、1987年度より支給されている。)

出席者：義務的でないため、出席者の数が掴めない。留学生の気分やその日の天候にも左右される。

#### (2) 実地見学と特別実習

時間：一応金曜日の午後の時間を充てているが、見学場所との関係で必ずしもその通りにはならない。また、指導教官の指導との関係で、留学生に取ってその時間が都合の悪い場合もある。

一日中、あるいは数日かかる場合もある。

引率教官に取っても、かなりの負担である。

旅費(経費)：遠出の場合は、留学生に取っては、かなりの負担である。東広島から広島市の文化施設を見学に行くのにも安くはない。

引率教官にとっても、引率旅費は支給されても、見学場所によってはかなりの負担を強いられる。

謝金：(1)参照。

### (3) 交流会、キャンプ等

目的は大きく2つある。一つは、日本人青年との交流であり、もう一つは、生きた日本語の活用である。が、これらの目的を十分には達成できていない留学生や日本人青年もいる。

### (4) 反省会・討論会

本音と建前が違う場合もよくある。

言いたい放題言っても、どうにもならない問題もある。

反省は十分するが、それが十分には活かされない場合もある。

## 4) 研修レポート

研修レポートを書くことは大いに意義があるということには異論は無いと思うが、その指導体制には若干の問題があるようである。

研修レポート集に関しては、当方が勝手に決めた形式ではあるが、90パーセント以上の関係者に支持されていると思う。レポートの書き方など何度か説明会を開いてはいるが、最後に書式(形式)を大きく逸脱するものが毎年一つ二つあるのは残念である。

## 5) 日本語・日本文化研修留学生をどう捉えるか。

最後に、「日本語・日本文化研修留学生をどう捉えるか」という基本的な姿勢の問題が実は残されていることを指摘しておこう。また、日本語・日本文化研修留学生をそれぞれの指導教官が指導すればそれで良いと言う考え方と、どこかの組織が責任を持って組織的にも体系的な指導をすべきだという考え方が対立している。このような対立は指導する側にも学生の側にも存在するようである。

ともかく、広島大学の場合は、このような対立はあるものの、現在は留学生センターが特別プログラムを組んで組織的に対応している。体系的に組織的に対応しようとするときの現在の広島大学の抱える大きな問題点の一つは、大学の統合移転の過渡期にあり学生のいるキャンパスが東広島市と広島市に分かれていることである。

## 4、問題解決と方策

上に挙げたような問題点の解決方法には、当然そうあるべきと思われるような改善策も多く考えられるが、その多くはまた実現し難いようでもある。

### 1) 日本語・日本文化研修留学生をどう捉えるか。

今上で述べたことから検討してみよう。これまでの経験から、また2で述べた「日本語・日本文化研修留学生」は、指導教官とは十分な話し合いを持ちながら、どこかの組織が責任を持って、組織的・体系的な指導をすべきだと思う。特に上に述べたように、特別プログラムなどを組んで、指導教官と十分に話し合いながら、指導していかねばならないであろう。

現在の移転問題は、その内には解決するとはいえず、具体的な方策を考えなければならない。

ところで、研修生を各学部に分けた場合のメリットとデメリットについて大ざっぱに考えてみると、

メリット：指導教官の幅の広い選択ができる。

デメリット：まとまったプログラムが組みにくい。

と、特別プログラムを組むには不利であるようであるが、広島大学が国際的にも大きく活躍するためには、一つの学部に限らないで、大きく広く連絡を取りながらまとまっていくことが重要であろう。

### 2) 日本語・日本文化研修留学生の多様性の問題

より多くの留学生に満足の行くような体系的なプログラムや授業を用意するためには、日本語・日本文化研修留学生の受け入れ段階で、専攻分野とか学習態度とかとりわけ日本語の実力に関して、もう少し厳しいチェックをする必要があるのでは無かろうか。

あるいは、上でも述べたように、日本語・日本文化研修留学生の多様性に対応できるようなスタッフと授業時間数が考えられなければならないであろう。

また、指導教官との連絡はある程度密にするように心がける。指導教官の方も熱意を見せてやる。

そして、学生チューターの手当は是非とも見直して、文部省から謝金を受ける学生チューターを付けてやると良い。

### 3) 日本語・日本事情の授業（留学生の多様性と日本語関係教官数との問題）

上記2)で述べたことと同様である。即ち、留学生の多様性の中で整理できるところは整理する

か日本語教育関係教官を補充するかである。

また、留学生の留学意識を改善する必要もあろう。

また、従来の自由参加的なクラスのあり方を改めることも必要である。

#### 4) 日本語・日本文化研修留学生のための特別プログラム

さて、特別プログラムの問題点は3で概観した通りであるが、それに沿っていくつかの改善策を考えてみよう。

##### (1) 特別講義

時間：講義をしていただく講師の都合との関係で、仕方無い点もあり、前回よりもできるだけ改善を試みる。

内容と構成：改善できる第一の点である。今までの諸例を考え、上に掲げた問題点を取捨選択しながら、より体系的なものを組むようにする。但し、出席する留学生達がまちまちな場合は、無駄骨である。コーディネータの自己満足だけに終る恐れもある。

興味が持てるように、情報を提供しなければならない。

講義謝金：講師の選定とお願いにも関わることで、十分な留学生教育特別配分経費(それに代わるものでも構わない)の予算が、速やかに支給されることを願うばかりである。

出席者：何らかの形で、出席を義務的なものにしたほうが良いのであろうか。とは言え、首に縄を付けておく訳にもいかない。

##### (2) 実地見学と特別実習見学と特別実習

時間：指導教官とも十分話し合っ、て、見学や実習に参加させたい。

旅費(経費)：留学生にとって一番の問題かも知れない。できるだけ負担を軽くするように努力はしている。経費が安く上がる方法を検討する。いくつかの見学旅行は校費でバスを借り上げるようにする。

##### (3) 交流会、キャンプ等

興味が持てるようにオリエンテーションをして、積極的な参加を呼びかける。

##### (4) 反省会・討論会

本音で出て来る意見は、大いに参考にし活かさなければならない。どうにもならない問題もあるが、得られた意見はできるだけ活かすように努力する。

#### 5) 研修レポート

研修レポート集も一応の成果を挙げているが、益々充実させて、100パーセントの支持を獲得したいものである。指導教官との密なる連絡を取り、説明会を開いて、精いっぱいレポートが書

けるようにする。

## おわりに

以上、現在まで行われてきた日本語・日本文化研修留学生のためのプログラムを中心に現状分析をしてみた。その中で、問題点と今後の課題を抽出し、その解決策を検討してみた。

上でも述べたように、一応の成果は上がっていると言えるが、もちろん、上に挙げたように問題点が改善されれば、益々成果は上がるであろう。充実した特別プログラムをスムーズに行うためには、十分な経費の交付も必要である。

日本語・日本文化研修留学生の中には、「日本へ行ったら、しっかり遊んで、日本と日本人をよく見てきなさいと大使館で言われました。」と、公言してはばからない留学生もいる。確かにそれも立派な日本文化の研修かも知れない。ただ、大学が提供する授業との関わりや指導教官との関わりの中からも重要な日本文化を見いだすことができることも十分に分かせたいものである。

各留学生の帰国後の進路や役割には、まだ不透明なところがあるが、日本での学習や体験が彼らの良き肉となり血となるように指導を心がけなければならない。

## 参考資料

広島大学留学生日本語教育研究室、『広島大学留学生日本語教育 第1号 一現状と課題一』

1989年3月

広島大学留学生日本語教育研究室、『広島大学留学生日本語教育 第2号 一歴史と研究一』

1990年2月

広島大学留学生日本語教育研究室、『広島大学留学生日本語教育 第3号』

(1991年3月 予定)

広島大学留学生日本語教育研究室、『日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 1989』

1990年3月

広島大学留学生日本語教育研究室、『日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 1990』

(1991年2月 予定)